



百餘年前の道標今も

輝く

和歌山縣日高郡龍神から紀州の屋根護摩

壇上に向ふ裏紀州縦走ハイキングコースの途中、海拔一千メートル東五百原、谷、西小森谷の分水嶺に高さ二尺二寸幅五寸横三寸六分の石の「道標」がある。表面は「右りうじんへ」「もし大水の時此方へまはるべし」と刻み横に「施主和州近内村藤岡長兵衛」とある、夫れで今日でも谷川の水嵩高く橋流れた時はまた元へ戻らねばならぬので此のことを知らしむる爲めの文字であつて久しい間村民に喜ばれて居る。此施主

は今の和歌山縣知事藤岡長和氏の祖藤岡長兵衛知重氏である。隠れたる篤志家の功績は百餘年後に顕彰せらるゝ唯目先計りの事に没頭して寸功もない所謂醉生夢死の徒は以て深く學ぶ所があつてよからう。

時代變遷のなげき

(氷川生)

近江の國は膳所の里に硫酸瓦斯の毒氣を吐き國際經濟戰上に其の偉力を示しておる人綱會社が建設されて、工業日本の姿を高い煙突に現はして居るが、今は昔「日本無双の勇士今方に自殺せんとす汝ら視てもつて我に倣へ」と刀を衝みて馬より投して死んだ今井兼平の碑が立てられて其の幽魂を

注 意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に涉らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯手に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

慰めて居る。其の勇士の姿も消へて七百年時代の變遷の力とはいへ夢枕に立つて弔はれざる亡魂の悶を訴ふる由もないのだ往き來るさの汽車の窓から眺めてはそゞろに涙を禁じ得ない併し時代變遷のなげきは獨り兼平のみではなからう。二百五十年前の事である土佐の國室戸の築港工事が野中兼山に依つて計畫された即ち延寶年間兼山の設計に基き一木權兵衛が普請奉行となつて工事に従事した。延人員三十六萬餘人を役して施工し完成に近づいた所が、港口に高さ九尺長十一間餘の斧礁を初め大小數個の岩礁がある。鱒礁、鬼牙礁などは容易に碎破したが、斧礁だけは手の下し様がなかつた人夫共が蟻集して大槌小槌を揮ふても

微塵も碎けず却つて槌が破損するのみであつた、一木奉行は是れ神石ならん海神の怒に觸るるから碎破し難いのであると考へ齋戒沐浴して「この役をしてよく竣成せしめ給へ工成らば直に己が一命を捧ぐべし」と誓つて一木權兵衛自ら大槌を揮つたところがアラ不思議、さしもの斧礎も木葉微塵と化してしまつた。夫れで此大難工事も思ひの外早く竣工を告げた身を捧げて其任に盡したる一木權兵衛の義烈今も尙感勵せしむるものがある。國立公園と指定されても地は土佐の僻陬である而かも客秋の颱風は勝地室戸を破壊した權兵衛の靈諒する所あるや否

(室戸の海士)

新五人組制度の樹立

か

徳川幕政時代に發生した五人組制度は隣保相助の精神を培養し、地方自治の根本義

を發達せしむるに至るべき制度であつた事は疑なき所である。然るに明治初年萬事が歐化主義に陥り折角我國に發芽しつゝあつた自治的萌芽も切り捨てられ魯國に佛國に其他歐洲先進國に現はれた地方自治制度を金科玉條と思ひ込み之を採り來つて、敢て探長補短の手法を施すことなく寧ろ鴉飲み丸飲みで、新制度を作り其の制度の力で國民を自治的に開發せんとしたのであるが、急テンポで轉移する勢の力は過去の時代に制定した制度をも重厩し名は自治でも實は官治であるかの如き實情に赴かしめた、茲に至つて舊五人組制度の如きもので其の儘國民を指導せんとするも決して國民更生の力はないものとなつたのである。故に舊五人組制度の精神を參酌し、新時代に適應する新五人組制度を樹立し以て今日の時代に處し明日の時代の基礎を確定せしむることを問題として研究するを喫緊事と感ずる。

(白洋生)

高等政策から何が出る

某新聞の投書欄に斯んな一文があつた。

「何でも或る一つの問題が、政治的にも事務的にも行詰まつたやうな場合に、謂ふ所の高等政策が行はれるのだ。たとへば……府縣なり、市なりが、主務省へ、認可、許可を申請するやうな場合、上級官廳の役人たちが容易に首を縦に振らない。そこで高等政策と稱して待合、料理屋、演劇場へ連れ出して一晩うんと御馳走攻めにしてやれば問題は案外早く片づいて、随分如何はしいやうな問題も樂々と認可になる。時には名産を贈り、記念品代を贈つても結果は同じである。この呼吸を知らなかつた或都市の庶務課長氏、毎日々々××省へ日參すると二ヶ月以上に及んで埒開かず、この暑いのに冬服でウロウロしてゐるので聞けば四

月出京した儘だとは、嘘のやうな本當の話だ。個人の場合には贈收賄になるが、實際費又は雜支出の名目に於て堂々公費でやる場合には差支へないらしい。所謂高等政策なるもの、内面は、検事局でも御存じないと見える。(羽塚紫也)と「萬事が萬事此調子でやつておるものでない、偶々不良の吏僚があつて投書の如き事件が生じたかも知れないが、社會の建て直しが唱へられ、國民の自力更生が論ぜられ、民情視察の行脚政策が講ぜられて居る今日マサカこんな心得違ひの官吏はなからう。昔の事であらう。赤字財政で苦しんで居つても名譽職の歳費値上げが行はるる時世とはいへ、夫れは極めて稀有の出來事である。(鬼耳坊人)

戸口調査からの帝都の姿

犯罪の後には女ありとは古くから言ひ傳へらるる所であるが、女なくして人間社會

は成立つものでないが、女の進出活躍振りはずさまじいものである。今に女の巡查も兵卒も出現するかも知れない。交通巡查が女であつたならコロラの響聲は交叉點から消へ去るであらう。それで帝都の戸口から女性を眺めると、東京府の人口は男三百十七萬四千餘人で女二百九十二萬千餘人計六百九萬五千二百餘人である。此内市部が男二百九十三萬四千餘人、女二百六十八萬三千七百餘人計五百六十一萬七千八百餘人である。殊に大森、蒲田、世田ヶ谷、目黒、杉並、中野、板橋等の新市域では人口激増し舊市内は既に飽和狀態に達して居る故に増加人口の三分の二を占めておる。地方からの上京者は主として舊郊外地に流れ込んで來るのである。そして人口の尤も多いは荒川區の三十一萬六千八百九十四人最少は麴町區の五萬三千九百九十一人である。警視廳發表統計に依ると毎日家外に出る通學生勤人百四十八萬七千八百九十八人の内女が五十一萬八千六十五人で男の半數

以上に及んでおつてパーヤカフエーや其他の飲食店に出勤しておる若き女性も多數あるのは事實である。實に女の社會進出は驚くべきものであるが興味をひかるる事相である。(房枝)

一足て二橋に跨る

伊豫と土佐との國境、宇和島、宿毛線の篠川橋は長サ僅かに四二米であるが、橋は正に愛媛高知の兩縣に架せられて橋の中央横斷線が縣界である。夫れで愛媛縣の側から見れば「愛媛縣ささかははし」とあるが高知縣から見ると「高知縣ささかははし」と刻まれてある。一の橋に名が二つあるので、橋の中央に立て左右足を踏張ると一は伊豫一は土佐に跨る譯である。此橋から愛媛の方へは松山に百十三キロ五百三十三米宇和島に六十一キロ十八米の距離で高知の方へは高知市に百六十二キロ二百十八米中村に三十二キロ六百十八米の距離である。(四國猿生)